

石綿起因の希少がん「静かな時限爆弾」

中皮腫 治療 支援を

「静かな時限爆弾」といわれるアスベスト(石綿)が原因の一つとされるがん「中皮腫」は、発症から平均二年で死亡する深刻な疾患だ。患者数が少なく、新薬開発の治験がなかなか進まず、治療法が限られている。国は建築現場で働いていた人向けの補償制度を創設したが、支援団体などは「給付金を支払って終わりではない。治せる病気への支援を続けてほしい」と訴える。(渡辺真由子)

「今は落ち着いているが、この先どうなるんだろう」という不安は常にある。昨年六月、中皮腫と診断された坂本寧さん(五七)は東京都北区に抗がん剤治療中だ。薬が合って腫瘍も小さくなってはいるが、症状が悪化する懸念を抱える。異変は昨年一月に起きた。散歩中に息苦しさを感

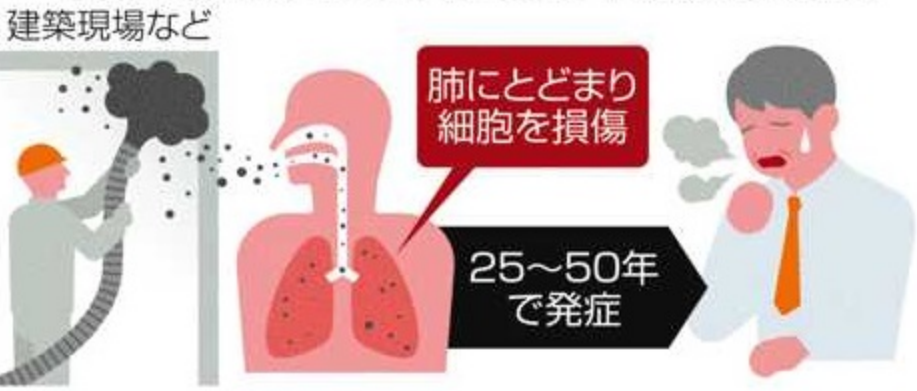
じた。新型コロナウイルスのオミクロン株が流行する中、救急車を呼んだものの入院できなかった。その後、病院で検査を重ねてようやく半年後に診断された。「なんで自分かと、しばらくは立ち直れなかった」。石綿は繊維状の天然の鉱物で、火に強く、保温に優れる。一九七〇～八〇年代後半に国内の建築現場などで多く使われてきた。

坂本さんは大学卒業から十四年間、建築現場で働いた。「石綿が使われた時期とぴったり当てはまる」。当時は今より対策への意識が低く、防じんマスクの着用なども徹底されていなかった。「どこでどのくらい吸ったかわからない」。治療を巡っては、二〇一八年に新薬「ニボルマブ」が承認された。しかし、「中皮腫・アスベスト疾患・患者と家族の会」によると、新薬が効く人は患者の約三割にとどまるという。

年間の発症者が約八百四十人と他のがんに比べて少なく、新薬開発のための治験が進みにくい現状がある。同会は、国が被害者救済のために創設した「石綿健康被害救済基金」について、基礎研究支援などへの活用を求めている。中皮腫は、石綿を吸い込んでから発症までの潜伏期間が二十五～五十年と長い。国内の発症者数は三〇年代にピークを迎えると予測される。坂本さんは「これからの患者のお手本となれるように治療に取り組み、生存率を高めていけるようにしたい」と望んでいる。

「治せる病気」に「患者ら訴え

石綿を吸い込むことによる中皮腫の発症



用語 中皮腫 アスベスト(石綿)を吸い込むことなどで発症する疾患。進行すると、息切れやせき、のどの痛みなどの症状が出る。国内では、2020年に中皮腫が原因で約1600人が死亡。石綿が引き起こす疾患は、他に肺がんや石綿肺(じん肺)などがある。



石綿被害 補償外の人も

安価な材料として建築現場などで多用されてきた石綿は、一九七〇年前後から吸い込むと肺に長くとどまり、中皮腫などを起こす可能性が指摘されていた。七五年から段階的に規制が進んだが、二〇二二年によろしく全面使用禁止となった。

「中皮腫・アスベスト疾患・患者と家族の会」は七月を「中皮腫啓発月間」と位置付け、十五日、二十九日には、医師が患者からの質問に答えるセミナーなどをオンラインで開く。問い合わせは、同会フリーダイヤル(0120)310279へ。

中皮腫の治療について語る坂本寧さん(東京都北区)

(0120)310279へ。